ルパン三世 短編小説 第３話

© モンキー・パンチ／TMS・NTV

電気じかけの支配者を探せ。

第一章

誰だって、ひとつやふたつ、忘れられない負の歴史はあるはずだ。
それは、あの名画が再びここに現れなければ、一生思い出したくない敗北だった。
ローマ近郊の街・スペリオーレにある「ボルド・タリエンテ美術館」。
遺跡群を一望できる小高い丘に聳え立つ、不気味な姿をした最も気に入らない美術館だ。
歴史的な建造物がひしめくこの街には、到底似つかわしくない。
振り返ること 10 年前「電子制御で守られた完全警備の宝箱」という
自画自賛のキャッチフレーズを掲げてオープンしたこの美術館は、
完璧なセキュリティシステムと未来を感じる独創的なデザインを、
オープン前から猛烈にアピールしていた。
世界中に広まったこのニュースは、俺の心をワクワクさせた。
それは、天下の大泥棒ルパン三世への挑戦状に思えたからだ。
ド派手なセールス文句が功を奏して、
この美術館にはオープン前から世界中の名だたる名画や美術品が集まってきた。
しかも、オープンの柿落としの目玉として
16 世紀の巨匠ペンネッロの最高傑作といわれる絵画「アヴィディタ」が展示されるという。
俺は、心の底から拍手を贈った。なぜなら、これほどまでに注目を浴びる場所から、
お宝をいただくなんて、名を知らしめる絶好のチャンスだと思ったからだ。
そして、自分自身の腕試しも兼ねて、
オープンまもないボルド・タリエンテ美術館へ潜入し、お宝の奪取を図った。
しかし、これが大きな誤算だった。
こんな強烈に鼻をへし折られたことは、俺史上初めてのことだった。

第二章

その日、大きな山を首尾よくこなした俺たちは、
ローマのアジトでささやかな祝杯をあげていた。今回も、計画通りのいい仕事だった。
気をよくした俺たちは、昔話に花を咲かせた。
今日のようにすべてが順調にいったこと、意外なハプニングに遭遇したこと、
そして時折銭形の話も交えて。
そんな中、バーボンをグラスに注ぎながら、次元が嫌な話をしはじめた。
「そういえば、ルパン。お前、一度美術館で死にかけたよな」
ボルド・タリエンテ美術館の話だ。
10年前のあの日、名画「アヴィディタ」を手にした俺は、
電子制御の警備システムを掻い潜って予定通りの逃走経路を駆け抜けていた。
しかし、あと少しというところで、大きな罠が待っていた。
それはメインゲート付近でのことだった。
左肩に、いままでに感じたことのない強烈な熱さと痛みが走ったのだ。
まさか、美術館の中にレーザー兵器を装備しているとは夢にも思ってなかった。
すでに気づくのが遅かったが、その時確信した。ここは、異常だと。
不穏な空気を察して駆けつけてくれた次元と五ェ門のおかげで、
命からがら逃げることができたが、せっかくのお宝はエントランスに置き去りのままとなった。
「あの時のお宝が、またあそこに来るんだとさ」と口を開いた俺に、
「あんな危ない場所へ行くのはよそうぜ」という次元。
「いつまでも借りたままじゃいられねぇ想いってもんがあるんだよ」と答える。
「懲りないヤツ。今度こそ、命を落とすぞ」と言い捨てる五ェ門の言葉に、なぜか笑みが浮かんだ。
「そうかい。好きにしな」と次元はハットのつばを少し下げながら、
あふれんばかりに注がれたバーボンのグラスを唇に近づけた。
その時、突然聞き覚えのある声が現れた。
「聞いちゃった」不二子だ。
「ルパンにも、そんなことがあったのね」
「うるせぃ！そんなことを言うヤツは、不二子ちゃんだって許さないんだからなぁ〜」
「もう、ルパンったら」
「いちゃいちゃするなら、よそでやってくれ！」と次元。
「ところで不二子。お主、何しに来た？」と五ェ門。
「ちょっと、いい話を持ってきたんだけど。聞きたい？」
訝しげな4つの瞳と、それとは真逆の表情を浮かべる俺の瞳が、
不二子を食い入るように見つめた。

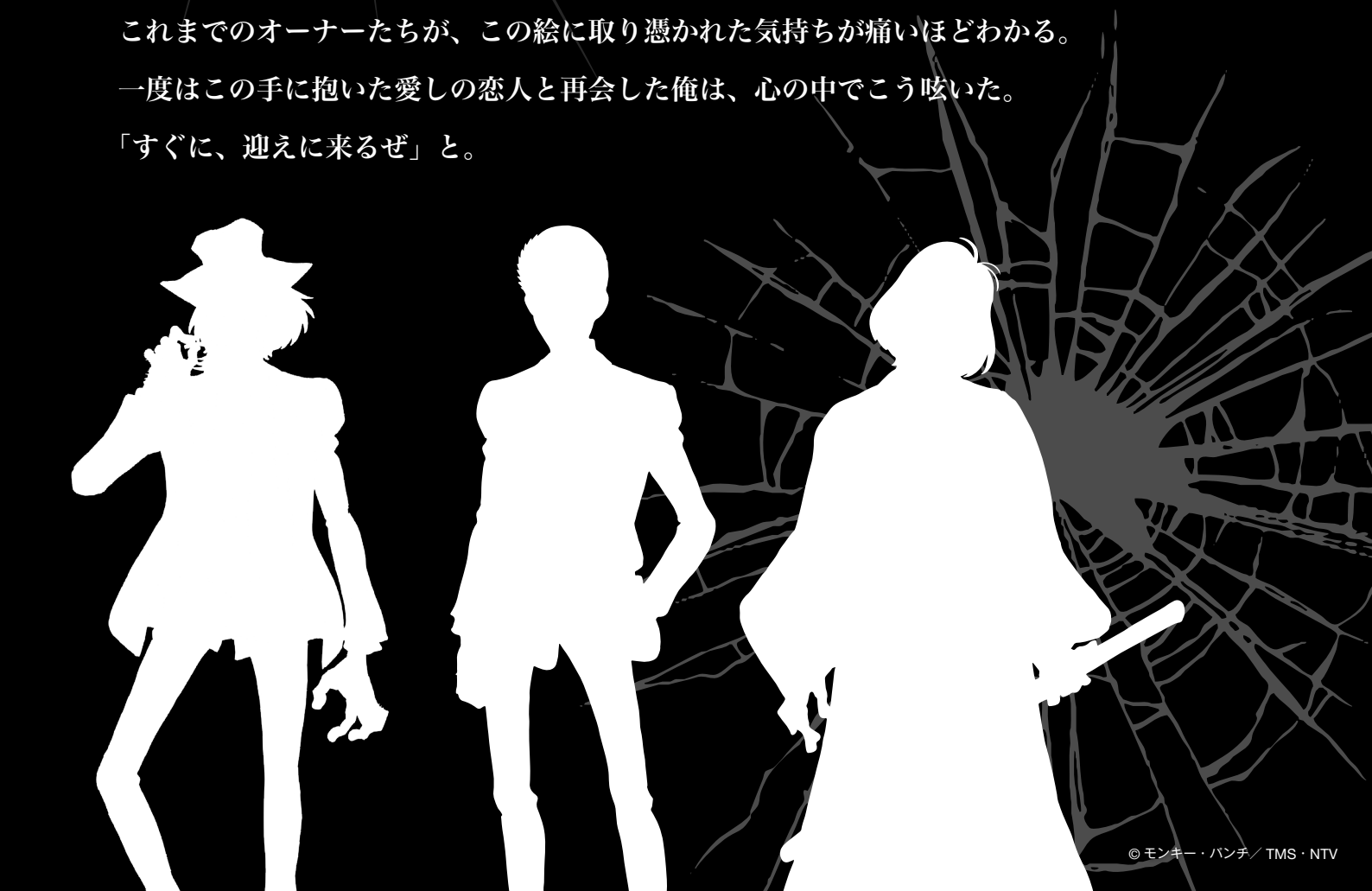
© モンキー・パンチ／TMS・NTV

第三章

ボルド・タリエンテ美術館の建つ場所が、いわくつきだということはあまり知られていない。
20 数年前まで、あそこには留置所があった。しかも、厳重な警備と劣悪な環境、
そして受刑者同士はもちろん、警察官からの暴力が頻発することで知られた、
罪の重いヤツらだけが収監される施設だ。
その留置所が取り壊されるきっかけとなったのが、
イタリアの歴史の中でも類を見ないマッドサイエンティストの Dr. フォリアだ。
科学、物理学、生物学、化学、そして最先端技術にまで精通し、
若い頃には「未来のレオナルド ダ ヴィンチ」と称されていた。
しかし、クローンの培養や生き物の掛け合わせをはじめ、
国内外で禁じられているありとあらゆる実験と研究を繰り返し、世間から拒絶されることに。
そして、いつしか表舞台から姿を消していったのだ。
何度も逮捕され、厳重な処罰を受けてもヤツは懲りなかった。
ほとんどの時間を、自分の研究室で過ごしていたため、詳細は明らかになっていないが、
かなり過激で常識はずれの研究結果を生み出していたようだ。
そして、ある日のこと。嫌な予感は的中した。
ヤツが生み出したトラとインパラを掛け合わせた奇獣が逃げ出し、
ローマの街を恐怖のどん底に叩き落としたのだ。
トレビの泉の彫像に、真実の口に、そしてパルテノン宮殿に大きな傷跡を残した。
もちろん、街の人々にも。
最後は、警察の手によって奇獣は射殺されたが、あまりにも多くの犠牲を払う大惨事となった。
当時を知る人は、事件後の街の様子を、
さながらコロッセオでの猛獣と剣闘士の戦いの後のようだったと語る。
事件後、Dr. フォリアはかつてこの地にあった留置場に収監され、
その中で息を引き取ったというが、詳細を知る者は誰もいない。なんとも不思議な話だ。
それからというもの、留置場では夜な夜な幽霊を見たり、異様な声や物音を聞いたり。
受刑者たちは大混乱になったらしい。
噂話は日に日に広がり、いつしか誰も近寄らない場所になっていった。
そんなことが数年続いた後、留置場は閉鎖となったのだ。
そうしたいわく付きの場所が、いまや世界屈指の人気美術館だ。
こんな呪われた場所に貴重なお宝を集めるなんて、建てたヤツの気が知れない。

第四章

また、この場所に来ることになってしまった。
できることなら来たくなかったというのが、正直な気持ちだ。
最高峰の美術品と最先端の警備が自慢のボルド・タリエンテ美術館は、今日も満員御礼だ。
しかし、巨大なラグビーボールを縦にしたようなこのカタチも、
黒光りした墓石のような外観も、相変わらず気味が悪いとしか言いようがない。
それにしても、この美術館には来館者以外、館長のチェルベッロと娘のクオーレ以外、
スタッフらしい人影を見ることがない。
やはり、不二子の言う通りなのか。
以前もそうだった。とにかく、ここは無機質極まりない。
俺は、お宝が鎮座する第二展示室へと歩みを進めた。
そして、16 世紀の画家ペンネッロの最高傑作「アヴィディタ」の前に立った。
10 年ぶりに出会ったコイツは、相変わらず複雑な表情だった。
美しくも卑しい、繊細でありながら大胆なその正気を失ったとしか言えない独創的な描写は、
いつ観ても言葉を失う。
これまでのオーナーたちが、この絵に取り憑かれた気持ちが痛いほどわかる。
一度はこの手に抱いた愛しの恋人と再会した俺は、心の中でこう呟いた。
「すぐに、迎えに来るぜ」と。



© モンキー・パンチ／TMS・NTV

第五章

世の中には、不思議なことがいくつもある。
この美術館のそれは、館長のチェルベッロと娘のクオーレがいつもいっしょにいることだ。
例えるなら、コーヒーカップとソーサーのように。
そして、もうひとつ。10 年前に出会った時から、
この二人は 1 秒も歳を重ねていないと感じるほど、容姿が変わっていない。
特に娘のクオーレは、以前見た時と同じ、中学生のような姿をしている。
この建物の見た目と相まって、その不気味さは時が経つごとに加速する。
それはともかく、前回と同じ轍を踏むわけにはいかない。
ボルド・タリエンテ美術館の館内図はもちろん、
そこには記載されていないご自慢の警備システムと防犯システムを徹底的に調べた。
それにしても、入念すぎるこの警備は異常としか言いようがない。
至る所に設置された監視カメラはもちろん、
最新の赤外線システム、メインゲートに設置された空港並みの X 線検査装置、
決して脱出を許さない 1 フィートを越える厚さのステンレス製のシャッター、
そして潜入者を始末するためのレーザー兵器。やはり、常規を逸している。
まだまだ、調べなければならないことがあるに違いない。
この場所は、決して侮ることはできないのだ。
前回も、館内警備を管理するシステムはすべてダウンしたはずだった。
それなのに、あの有様だ。
きっと、あの場所以外にも警備と管理を司る場所があるはずだ。
ただ、入手した資料では見つけることができない。
この謎を解き明かさなければ、今回の山を越えることはできない。
改めて、この山の高さを痛感した。

第六章

スペイン広場で待ち合わせとは、まるでデートのようだ。
誰もが知るあの名作映画に登場するこの場所も、時代の流れでだいぶ様変わりしていた。
不二子が現れたのは、約束の時間から５分ほど遅れてのことだった。
その手には、ステレオタイプを絵にしたようにジェラートが握られていた。
「ここでジェラート食べるの、いまは禁止なんだぜ。階段に座るのも御法度だ」
「えっ、そうなの？知らなかったわ」
「こんなことで捕まっちゃ、つまらないぜ」と言った後、
俺は不二子の冷たいお宝をひと口 GET した。
「もう。せっかく並んで買ってきたのに」
「おっと、それが遅刻の理由かい？」
「それはともかく・・・」
いきなりはぐらかされた。しかも、いきなり本題だ。
不二子の話は思っていた以上に興味深いものだった。
もちろん、ボルド・タリエンテ美術館に関する内容だ。
それは、にわかに信じ難いものだった。
しかし、差し出された写真や資料に載っていたのは、紛れもなくソレだった。
「私も、最初は信じられなかったわ」
不二子も、当初は自身の目を疑ったらしい。
この時代、何があっても不思議ではないが、先進技術がここまで進化していたとは。
常識では考えられないことが、この世にはいくらでもあるのだと改めて痛感した。
「ところで、こんなヤバい情報、どこから仕入れたんだ？」
「それはね・・・」
なるほど、なかなか興味深い情報網だ。
今回の件では、その情報源とも取引をするらしい。
いつも思うが、不二子は本当に隅におけない。
その他に、不二子もあの美術館にある絵画を狙っていることを明かしてくれた。
ターゲットは、ルネサンスの名作「永遠のヴィーナス」。
その名前を聞いて、なんとも彼女らしいと心の中で微笑んだ。
そして、俺と不二子は今回の企てに関する平和条約を熱く交わした。

第七章

見渡す限り世界遺産といっても過言ではないローマの街に、
日本国宝とも言うべき愛しのトレンチコートを着た男とけたたましいサイレンの音がやってきた。
「なんだ、こりゃ？これが美術館なのか」
その異様な姿を見て驚く銭形を見つめながら、
無表情の二人が美術館のメインゲート近くまでやってきた。
「なにか、ごようですか？」
「私はインターポールの銭形です。あなたが館長のチェルベッロさんですか？」
「はい。そのとおりです」
「そちらは？」
「むすめのクオーレです」と愛想も生気もない声でチェルベッロは答える。
「ルパンから、予告状が届いたとお聞きしまして・・・」
「はい。そうです。だれが、しらせたんですか？」
「来館していたお客さんです。私たちが、ルパンを捕まえますのでご安心ください」
「なにもしていただかなくてけっこうです」
「そうはいきません！相手は指名手配中の大泥棒です。私たちが必ず捕まえてみせます」
「ごしんぱい、いりません。わたしたちで、なんとかしますので」
その感情のない受け答えに違和感を覚えながらも、銭形は引き下がらず、こう続けた。
「とにかく、ルパンから予告があったのであれば、私たちは24時間体制で警護します」
「そうですか。すきにしてください。ただ、おきゃくさまのめいわくになるので、
しきちのそとでおねがいします」
少しの温度も感じられないチェルベッロの応対に、銭形はこの上ない寒気となんとも言えない心地悪さを感じていた。

第八章

作戦決行の時が近づいてきてきた。

それにしても、今回の山は少々心が痛む。

なぜなら、この手で人を殺めることになるかもしれないからだ。

しかし、仕方がない。10 年間夢見てきたあの名画を手にするためだ。

そして、あの屈辱を晴らすためなのだから。

ボルド・タリエンテ美術館の監視システムには、ひとつ大きな穴がある。

赤外線をはじめ、多彩な防犯センサーを張り巡らせてはいるが、

監視カメラはすべて床方向を向いている。

つまり、上部がガラ空きなのだ。

さらに、万全な館内の警備に比べて、外の警備がこれほどまでに手薄なのが逆に気になる。

どちらにしても、潜入前にメインの監視システムを停止または破壊することは必要不可欠なのだ。

不二子からの情報が正しければ、この山を成功させるためには、

館長のチェルベッロを美術館の外に引っ張り出さなければならない。

そこが、すべての鍵となる。

それにしても、いつもの黄色い相棒は、まだお休みのままだ。

しかも、今回のお宝は襖絵サイズときてる。

トリノでの相棒『500』や『500e』では、流石に心許ない。

そこで、俺は新たな相棒『600e』を用意した。

トリノでいっしょだった『500e』と同じ EV（電気自動車）だ。

ローマの街をクルージングした時のファースト インプレッションはとてもいい。

それにしても、馴染みのないハイカラな装備がてんこ盛りだ。

最新の相棒の先進性も、あの美術館に引けをとっていない。

お宝を GET する日まで、まだ時間はある。

もっと、お互いのことを知り合おうぜ、なぁ相棒。

第九章

ついに、この日がやってきた。

まだ、不確かなこともあるためか、いつも以上に緊張が走る。

今日はボルド・タリエンテ美術館の休館日なのに、丘の麓には銭形たちが警備をしている。

まぁ、それはすでに織り込み済みだ。

最新の相棒『600e』を美術館南西の所定の位置に隠し、

次元と五ェ門、そして不二子は予定通りの場所で待機している。

「ルパン、準備は出来てる」と次元。

「無理は禁物だ」と続く、五ェ門。

「ありがとな、次元、五ェ門。あれっ、不二子ちゃんは？」

「この仕事がうまくいったら、美味しいイタリアンディナーをご馳走してね」

「おぉ〜、もちろん。約束だぜぇ〜」

「おい、ルパン。気を引き締めていこうぜ」と次元に嗜まれた。

「さぁ、みんな、はじめるとするか」

第十章

黒光りする奇妙な美術館のメインゲートに銭形がいた。
「お休みのところ、申し訳ありません。インターポールの銭形です」と、
この上なく大きな声が広々とした美術館の敷地内に響き渡った。
その声を聞き、館長のチェルベッロがインターフォン越しに応対する。
「なにか、ごようですか」
「少々、お伺いしたいことがありまして」
「いまでなければ、だめでしょうか」
「はい、ちょっと急ぎの件でして」
「しょうしょう、おまちください」
ほどなくして、重苦しいメインゲートが開き、チェルベッロが現れた。
「申し訳ありません。どうしても、確認したいことがありまして」
「なんでしょう？」
「あそこの木の近くの防犯カメラなのですが」と指をさす銭形に
「どこでしょう？」とチェルベッロが答える。
「あそこです、あそこ」
「どこでしょう？」
チェルベッロがさらに歩を進め、メインゲートの外に５歩ほど出た時、閃光が走った。
五ェ門の斬鉄剣だ。一瞬、時が止まったように感じられた。
「また、つまらぬ物を斬ってしまった」と五ェ門が呟く。
次の瞬間、チェルベッロの無表情な顔は床に佇み、
青白く細長い身体は両膝をついた姿のまま動かなくなった。
俺は、銭形のマスクを外し、メインゲートから館内に侵入した。
やはり、警備システムは作動していない。アラームは鳴っていないようだ。
チェルベッロを館外に出さなければいけない理由は、これだった。
念のため、館内図に示された管制室の警備システムをすべてオフにした後、
お目当てのお宝へ足早に、そして慎重に歩を進めた。

第十一章

チェルベッロが動きを止めた後、メインゲートから堂々と侵入した不二子は
「永遠のヴィーナス」の元へと急いだ。
この名画はノーマークだったのか、早々にお宝を手に入れた不二子は額縁から絵画だけを外し
ポスターケースに移すと、それを背負い電光石火の如く、この忌まわしい場所から立ち去った。
俺はお目当てのお宝の元へ、次元と五ェ門は事前に決めていた場所へと向かった。
すると、思いもよらない事態が発生した。
名画「アヴィディタ」の前に、チェルベッロの娘クオーレが仁王立ちで待っていたのだ。
しかも、見慣れた無表情ではなく、初めて見る怒りにあふれた顔をしていた。
「おまえか？チェルベッロを、こわしたのは・・・」
「壊した・・・」
やっぱりそうか。不二子の情報は間違いなかった。
「あぁ、あのヒョロ長い館長、ボロボロにしてやったぜ」
「うぅうぅうぅうぅ・・・」
娘の表情が、明らかに変わった。なんだか雲行きが怪しくなってきた。

© モンキー・パンチ／TMS・NTV

第十二章

美術館の中で、どんな騒動が繰り広げられているか、銭形は知る由もない。
ただ、それでいい。
銭形には、俺たちと追いかけっこをするという重要な任務が残っているのだから。
それにしても、予想外だった。
クオーレは、ペットのような存在だと勘違いしていた。
彼女が見る見る血相を変えると、名画「アヴィディタ」が飾られている
第二展示室出入り口のシャッターがものすごい勢いで閉じられた。
この部屋には、俺とクオーレ、
そしてその様子を見つめている世界中から集められた美術品だけだ。
さぁ、どうする？
この状況、間違っても優勢とはいえない。
しかも、何が起こるか予想がつかない。
すると、右上方からレーザーが照射された。前回くらったのと同じヤツだ。
しかし、こいつの対策はわかっている。
エネルギーを溜め込むために、照射３秒前から微かにキューという音が鳴る。
つまり、音が聞こえたら、３秒後に避ければいい。
これも、不二子の情報のひとつだ。
そのために、イヤホン型の特殊な集音器を備えてきた。
１発目のレーザーを避けた俺は、迷わず引き金を引いた。
10代半ばの少女に銃口を向けるのは気が引けるが、コイツはアンドロイドだ。
しかも、この美術館の攻撃を担当する兵器なのだ。

第十三章

それにしても、なんとも数奇な運命だ。
美術館の館長チェルベッロと娘のクオーレは、
マッドサイエンティスト Dr. フォリアが生み出した超 AI を搭載したアンドロイド。
つまり、悪魔の置き土産なのだ。
Dr. フォリアが自身の警備役として創ったチェルベッロと、防衛役として創ったクオーレ。
この 2 体のアンドロイドが、亡き父の遺言を忠実に守り、
創造したのがボルド・タリエンテ美術館。
世界中から超一級の美術品を集め展示することにより、最高品質の供養を永遠に続けさせる。
しかも、絵画や彫刻を目的にやってくる来館者を自身の墓に訪れる参拝者として迎える。
それが、自らの研究に対して、
真摯にそして熱心に没頭してきただけの科学者であるにも関わらず、
世間からマッドサイエンティストと揶揄され、収監されたまま息を引き取った、
彼のささやかにして最大、そして根深い呪いのような抵抗だったのだろう。
それにしても、あまりにも悍ましい。
そして愚かな目論見だと、俺は心の底から愚弄した。

第十四章

少し思惑が外れたようだ。
引き金を引いた俺は、間違いなくクオーレの左胸元にヒットさせたと確信していた。
しかし、彼女は先程と同じ表情で、こちらを睨み続けている。
また、例の音が鳴りはじめた。今度は、どこから狙ってくるのか。
そう身構えている俺の鼓膜に、聞き覚えのある銃声が３つ響いた。
次元のコンバットマグナムだ。
この第二展示室に装備された攻撃システムを、寸分の狂いもなく瞬時で仕留めていた。
さすが、次元だ。
「遅いじゃねえか」
「悪い、悪い。ダクトをくぐり抜けるのに、時間がかかっちまって」
煤だらけの次元が、ニヒルな表情で応える。
その直後、娘の表情はさらに憎しみを増していた。
そして、ワァーと大きな叫び声を上げながら、両手を左右いっぱいに広げた。
さっきとは、まったく違う空気を感じる。
すると、数十箇所、第二展示室の壁に穴が開き、そこからドローンが放たれた。
この暗い状況の中でもわかる。鈍く光る機関銃を装備している。
派手にぶっ放せば、この部屋にあるお宝は、すべて蜂の巣だ。
クオーレが、両手を頭上に上げた。きっと発砲の合図だ。
その瞬間、再びコンバットマグナムの心地よい銃声が聞こえてきた。
さらに、風を切り裂く涼しげな刃の音色も。
片時の間に、展示室中からバタバタという落下音が聞こえてきた。
次元と五ェ門には、いつも感謝しかない。
クオーレの表情は、さらに一段階険しくなっていた。
そして、娘が再び両手を頭上に上げると、キューというあの音が無数に鳴りはじめた。
俺は、10年前の痛みと屈辱を無意識に思い出し、心の奥底で覚悟を決めていた。

第十五章

相棒たちは、思いの外、冷静だった。

クオーレを仕留めきれなかった理由。

それは、狙った急所が間違っていたからだ。娘はアンドロイドだ。

見た目に捉われて、ついポイントを誤った。俺も、まだまだ人間臭い。

しかし、五ェ門のそれは違っていた。

頭上に両手を上げるクオーレを、何の躊躇もなく、

そして瞬きする間もなく切り裂いた。

あえて言うなら、原型がわからないほどに。

「然様然らば是にて御免」という呟く五ェ門の声が微かに聞こえてきた。

その直後、異様なアラーム音とアナウンスが鳴り渡るとともに、

館内はガタガタと地響きのように震え出した。

「発射まで、あと３分。発射まで、あと３分」

緊急事態であることは間違いないようだ。

次元は、未だに飛んでくる無数のドローンを打ち落としながら、

「なぁ、ルパン。コイツらは、あといくつ飛んでくるんだ？」と問いかけてくる。

そんなことは、知る訳がない。なので、俺は聞こえない振りをした。

五ェ門は、分厚いシャッターで閉ざされたゲートへと向かい、無言で斬鉄剣を振るった。

俺は、狙っていたお宝「アヴィディタ」を壁から外し、床に置いた。

そして、焦る気持ちを抑えながらゲートが開くのを、平常心を装って見守っていた。

第十六章

ボルド・タリエンテ美術館を出たのは、あの出来事の数秒前だった。
五ェ門の斬鉄剣をしても、貫通まで２分を要したシャッターを潜り抜け、
全速力で屋外へと逃げ出した。
メインゲートに転がっていた館長の頭部を拾い上げ、できるだけ遠くへ。
その直後、不気味な美術館は耳をつんざく爆音と、
むせかえるほどの土煙を撒き散らしながら、上空へ舞い上がった。
時価総額数兆円の名だたる美術品とともに。
これも、Dr. フォリアの企てなのだろう。
自らの供養の最後の仕掛けがこれか。なんて身勝手で、傲慢なんだ。
俺は、宇宙へ向けて放たれた美術館の守り神であった２人のアンドロイドに、
心の底から哀悼の意を。
そして、この悲劇を生み出した張本人である Dr. フォリアに、
この上ない軽蔑の思いを贈った。

第十七章

コイツを相棒に選んで正解だった。
名画「アヴィディタ」を奪取した俺たちは、急いで『600e』へ向かった。
今回のお宝は、ちょっとデカい。
それを見越して事前に後部座席を倒し、広いラゲッジスペースを確保した。
バンパーの下につま先を近づけリアゲートを開け、
俺と次元は名画「アヴィディタ」を、もうひとりの相棒に積み込んだ。
さぁ、出発の時が来た。
「五ェ門、悪い。ルーフの上でいいか？後の席、予約済みで」
「よかろう」五ェ門は言葉少なに、ひらりとルーフに降り立ちあぐらをかいた。
「行こうぜ」次元のその言葉を合図に、俺はアクセルを全開に踏み込んだ。
ローマ中心部へ向けて走る『600e』の乗り心地は快適だ。
EV ならではの静かさとパワフルな走り、
そして急なカーブでもルーフ上の五ェ門が座っていられる安定感も格別だ。
さっきまで美術館が鎮座していた丘を下っていくと、そこは大変な騒ぎになっていた。
無数の人が上空を見上げ、ロケットを打ち上げたときのような一筋の煙を見つめていた。
その騒然とした街の雰囲気は、
まるでこの世の終わりを目の当たりにしたような表情を浮かべていた。
途中、坂を駆け上がってくる銭形を先頭にしたパトカーの団体とすれ違った。
「おぉ〜、とっつぁん！」
「おい、ルパン！貴様、何をした？」
「俺たちは､何もしてないぜ。美術館が勝手に飛んで行っちまっただけさ。それじゃ､またなぁ〜」
遠のいていく銭形に手を振りながら『600e』は、軽快に坂道を下っていった。

第十八章

ローマの街の賑やかさは、もうしばらく続くことになりそうだ。
まずは、不二子との約束の場所へ向かった。
テヴェレ川沿いを南に進むと、第14代ローマ皇帝が永眠するサンタンジェロ城が見えてきた。
さらに、南へ走り橋を渡ると程なくして不二子との約束の場所フォロ・ロマーノに到着した。
紀元前500年程の古に栄えた「ローマ市民の広場」という名のこの場所。
遺跡しか残っていないいまでも、人々の活気や熱量を感じるのが不思議でならない。
そして、お得意の5分遅れで、不二子はバイクに跨ってやってきた。
「早かったわね」
「不二子が遅いだけだ」俺よりも先に、ルーフの上に佇む五ェ門が口を開いた。
「あら、嫌だ。五ェ門も、そういうこと言うようになったのね」
「・・・」相変わらず、詰め寄られるのは苦手なようだ。
「そうそう、館長の首、持ってきたぜ」
「ありがとう、ルパン。でも、それよりいまは逃げた方がよさそうよ」
「待て〜！ルパン〜！」
米粒くらいにしか見えないあんな遠くからでも、銭形の声はよく響く。
ここはひとまず、逃げるとするか。
コロッセオを中心に放射状に広がる道を左折し、北へ向かって走る。
「おい、ルパン。後ろの生首、何とかならねえのか？」
「どうした？」
「機械だってわかっていても、気持ちのいいもんじゃねえんだよ。
ハンドル切るたびに、ゴロゴロ転がって」
「あはは・・・」
「笑いごとじゃねぇ。あっ、目、目、目が合った！」
こんなに怯える次元の表情も、世界遺産級かもしれない。
ちなみに、不二子の話によるとチェルベッロの頭には巨額の富を手にできる重要なデータと、
イタリア国家を揺るがす程の極秘情報が蓄積されているらしい。
ということで、この脳内コンピュータを渡すことが、不二子との契約のひとつになっている。
でも、ゴメン。不二子。あとで館長の頭はプレゼントするが、
コピーNGという約束はなかったので、データは丸っと頂いておいた。
それにしても、銭形たちのパトカーの群れは相変わらず諦めが悪い。
でも、航続距離が500kmに迫る『600e』なら関係ない。
次元と五ェ門、不二子と銭形。腐れ縁のこの面子でローマの街並みを眺めながら、
行けるところまで追いかけっこを楽しむのも悪くない。

終章

お宝 GET のためだといえ、２体、いや２人のアンドロイドを殺めることになった。
これまでに、何人の同業者が彼らの餌食になったのかはわからない。
もしも、そうでなければ、何の罪もない２人を葬ってしまったことになる。
お宝を手にしたよろこびはあるにせよ、何とも心が痛む。
しかし、イタリア史上、類を見ないマッドサイエンティスト Dr. フォリアの遺伝子を、
この世に残しておくわけにはいかない。
未来から断ち切るための、致し方のない代償だと信じることにしよう。

Fin